

資源評価シート

魚種名：バカガイ

1. 生態的特徴

バカガイ *Macra chinensis* は、サハリン、オホーツク海から九州、中国大陸沿岸の砂泥底に分布する。産卵盛期は、北海道では夏季、東京湾では春季と秋季、鹿児島湾では春季から冬季、三河湾では春季から夏季であり、水温 20°C での浮遊幼生期は 15 日間である。三河湾の初期稚貝は 1 年以内に殻長 4 cm に達し、漁獲対象となる。性成熟する最小サイズは殻長 2.5~5 cm、性比は 1:1 である。寿命は諸説あり、よくわかっていない。資源の分布や年変動は波浪の影響を強く受ける。また、アサリよりも低塩分耐性が低い。資源量は年変動が大きい。

伊勢湾では 1 年貝（殻長約 4 cm 以上）の個体が漁獲対象となり、2 年貝の殻長 6 cm 以上のものは高値で取引される。県内全域で漁獲され、津市、伊勢市、鈴鹿市での漁獲量が多い。主に小型機船底びき網で漁獲される。

2. 資源評価の指標となったデータ

三重県水産研究所が 2013~2022 年（2019、2020 年は欠測）に松阪地区で採泥器を用いて調査したバカガイの生息密度を整理した。この調査は、毎年 11 月に松阪地区の 120 測点で簡易軽量グラブ型採泥器（採泥面積 0.05 m²）を用いて 2 回採泥し、目合 2 mm のふるいで採捕したバカガイを集計・測定したものである。本評価では、殻長 20 mm 以下と殻長 20 mm より大きいものに分けて、それぞれの平均密度を求めた。また、その 90%信頼区間をブートストラップ法で求めた。11 月の殻長 20 mm より大きいものの生息密度にもとづいて、三重県資源評価委員会における資源評価基準 (<http://www.pref.mie.lg.jp/common/content/000889584.pdf>) により、資源水準と動向を判断した。

3. 資源評価結果

資源水準：低位

資源動向：減少

4. 資源評価の根拠

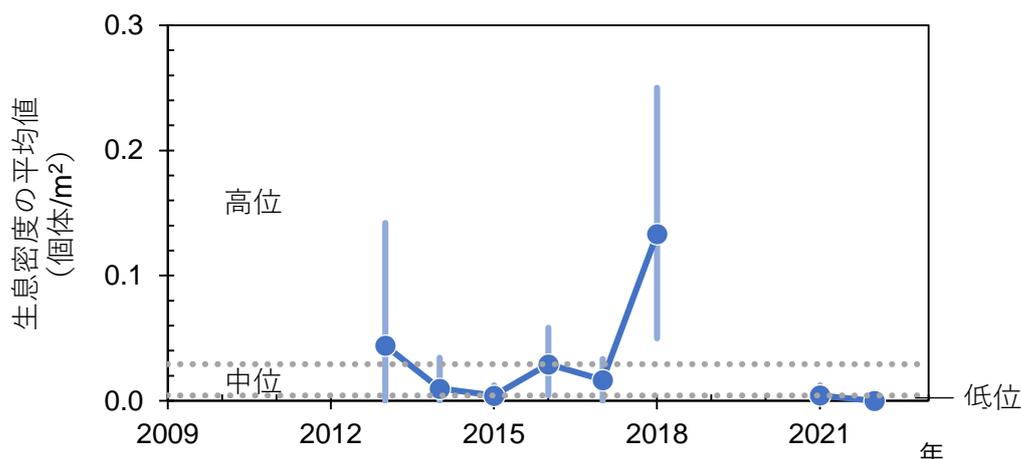


図1. 2012~2022年の松阪地区のバカガイ生息密度
誤差バーは90%ブートストラップ信頼区間を表す。点線は資源水準の基準値を表す。

過去 10 年間の松阪地区における殻長 20 mm より大きい個体の生息密度は、2022 年が 0 個体/m² で

あり、水準中位の下限 0.004 個体/m²を下回った。過去5年間の年変動率は-44%であり、横ばいの下限値 (-5%) を下回った。以上より、資源水準を「低位」、資源動向を「減少」と判断した。

5. その他関連情報

農林水産統計における本種の漁獲量は「その他の貝類」として集計されている。本県におけるこの「その他の貝類」には、漁獲量の多いトリガイ、バイ、ヤマトシジミなども含まれているため、本種漁獲量の把握には各地区の水揚げ票の整理が必要となる。また、アサリやハマグリが漁獲対象となっている地区ではそれらの単価の方が高いため、バカガイ資源が形成されても漁獲対象とならないことがある。逆にアサリやハマグリが不漁の年はバカガイが主な漁獲対象となることもある。そのため、漁獲努力量の算出は難しい。ほとんどの地区において漁獲量の上限が設定されていることも漁獲努力量の把握を難しいものになっている。

2011年以降の各地区の漁獲量は年変動が大きかった(図2)。2019~2020年の伊勢地区では記録的な豊漁となった。また、松阪地区での漁獲量も2019~2020年に多く、当地区では2018年11月の生息密度が高かったこと。伊勢地区と松阪地区の2019~2020年の漁獲対象群は2018年に発生したものと推測される。アサリ・ハマグリと同様に湾奥部から湾西部・南部への幼生供給がある可能性がある。

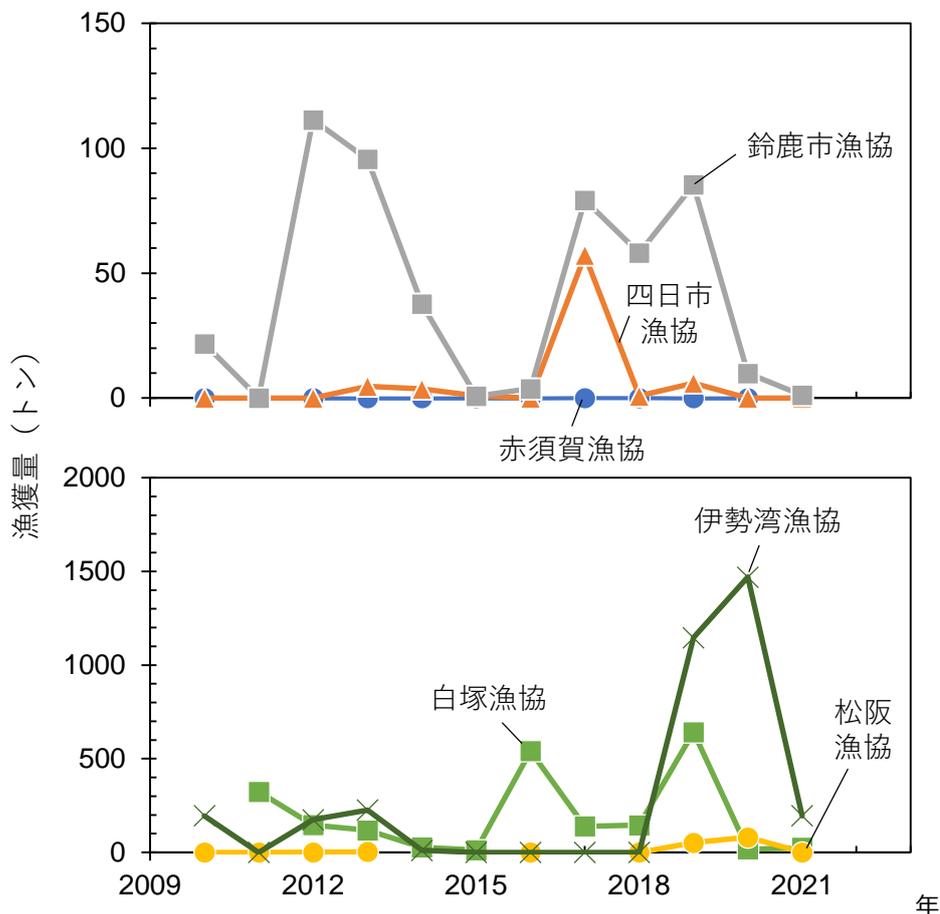


図2. 2010~2021年の伊勢湾の各地区のバカガイ漁獲量

6. 謝辞

本評価で使用した漁獲量は関係漁協が取得したものである。また、稚貝発生量、母貝生息密度、溶存酸素濃度、栄養塩濃度、クロロフィルa濃度の一部は、三重県水産研究所が水産庁水産基盤整備調査委託事業と水産庁資源評価調査事業により取得したものである。